

思いや意図を持って、主体的に表現できる生徒の育成 ～協働的な学びを通して～

米田 衣里

1 音楽科が目指す「夢中になって問い続ける生徒」とは

本校音楽科では、「夢中になって問い続ける生徒」の姿を、①音楽を味わいながら聴き、音楽のよさや美しさを見出そうとする姿。②こだわりを持って、試行錯誤しながらよりよい表現を目指そうとする姿。③他者との関わりの中で、自分の考えを深めたり広げたりしながら学び合おうとする姿。④音楽活動による楽しさや達成感、感動を味わいながら、次の学びへ生かそうとしている姿。と捉えました。そこで、今年度の音楽科研究テーマを「思いや意図を持って、主体的に表現できる生徒の育成～協働的な学びを通して～」として、「夢中になって問い続ける生徒」の姿に迫ることにしました。この「思いや意図」とは、生徒自身の思いや意図はもちろんのこと、曲に込められた思いや意図も含まれています。また、「表現できる」とは、表現活動のみならず、鑑賞活動においても音楽を味わいながら聴き、自分の感じた音楽の魅力を自分なりの根拠を持って、音楽の言葉を使いながら言語化できるという意味です。

2 「夢中になって問い続ける生徒」を育成するために

上記の「夢中になって問い続ける生徒」を育成するためには、生徒が思いや意図を持って創意工夫したり、音楽を深く味わって聴く力を身につけたりする音楽的な見方・考え方を働かせた学習の積み重ねが基軸となります。さらに、「どのように表現したら伝わるだろう」「なぜこの記号がついているのだろう」など感じ取ったことや表現したいことを他者に伝え合うことで、自分の思いやイメージを明確にしたり、気付かなかったことに気付いたりしながら自分の考えを深めることができるため、協働的な学びが重要と考えます。そこで、本校音楽科では、以下の2点について取り組んでいます。

(1) 思考を促すための教材や問いの工夫

「夢中になって問い続ける生徒」の主に①の姿に迫る手立てとして、「比較する」という手段は効果的であると考えます。音楽を形づくっている要素などに違いがあるものを比較することで、生徒が音楽を形づくっている要素の働きと曲想との関わりや表現の工夫に気づき、音楽のよさや美しさを感じ取れることを目指します。

例えば、2年生の「フーガ短調」のパイプオルガンについての学習では、パイプオルガンの音色の美しさに気付かせるために、ピアノで演奏したものとパイプオルガンで演奏したものを聞き比べさせました。そうすることで、フーガ短調にはパイプオルガンの演奏の方が合うことを、実感を伴いながら理解することができ、さらには、「なぜパイプオルガンで演奏しているのだろうか」という問いにつなげることができるだろうと考えました。生徒の振り返りでは、「今までは、ピアノとあまり差がないだろうと思っていたが、パイプオルガンの重い音色でフーガ短調の不思議な雰囲気が出ていた。」「ピアノと比べて、深みがあり迫力が感じられる音色で、フーガ短調の重いイメージがパイプオルガンによってさらに引き立っていた」と書かれており、比較する前と後では、曲の味わい方に変容が見られ、より音楽の美しさに気付く姿が見られました。

また、「夢中になって問い続ける生徒」の主に②の姿に迫る手立てとして、教師がその題材において、ねらいや育成したい資質・能力を明確にし、生徒の発言を意図的に拾い上げながら問いにつなげる状況を作るようにしました。

例えば、1年生の創作の1時間目の授業では、育成したい資質・能力を「表したいイメージを持ち、イメージに近づけるために旋律やリズムを工夫することができる」とし、授業を展開していきました。「もうすぐ楽しい夏休み プールにお祭り ウキウキだ」という詩に、言葉の持つリズムを生かしてこの詩に合うリズムを個々でつくった後、まずは旋律の前半部分を教師があえて落ち着いた雰囲気につくり、弾いて聴かせました。そこで生徒から出た「なんか楽しくなさそう」という発言に対し、教師が「どうしたらよいだろうか」と問いかけることで、「音を下げるのでなく、上げるといいと思う」と旋律に注目した意見が出てきました。さらに、続きを生徒が



資料1 話し合いながら考えている様子

考える活動をする際に「ウキウキしていない」などの何気ない発言を拾い上げ、教師が「どうしたらウキウキしている感じになる?」「音の高さ以外に楽しい感じにする方法はないだろうか」など注目させたい要素につながるように問い、他の要素にも意識を向けさせました。生徒には自分のイメージと音楽を形づくっている要素を関わらせ、「どのようにしたら詩に合う音楽ができるか」など試行錯誤しながら工夫をしていくことに繋げていきました。

(2)協働的な学習の場の設定

「夢中になって問い続ける生徒」の主に③④の姿に迫る手立てとして、学習指導要領の目標にも記述されているように、協働的な学習は欠かせません。その際、単に言葉をやりとりする場とならないよう、特に1年生の段階では話し合う視点を具体的に提示することで考えが深められるようにしました。また、音楽の学習に対して苦手意識がある生徒には、互いに教え合うことで「できなかったことができるようになった」「音楽の特徴に気付くことができた」など「わかる」という実感を持たせ、さらには教師が適切に声をかけることで、音楽の楽しさや達成感につながるものと考えます。

1年生の鑑賞の授業では、楽曲について一人一人が批評文を書いたあと、班で意見交流を行いました。その際の生徒の振り返りでは、資料2のような記述が見られ、他者から学ぼうとする姿が見られました。

新しく知ったこと、できるようになったこと	これまでの経験やこれまで学習した授業、他教科とのつながり	生活やこれからの授業でどのように生かせるか、新たな疑問や課題
音楽の鑑賞の感想のときは、一般的表現だけでなく、自分なりの言葉で表現し、他の人の感想を聞いて、様々な正解がある音楽を多面的に鑑賞していくのが良いと分かった。	音楽は計算問題のように答えが1つだけではなく、見方によって色々な捉え方ができるので、他の人の意見を共有し、自分1人の視点だけでなく、沢山の人の視点からも見ることで、より音楽を楽しめることを改めて実感した。	自分の考えたけ推し進めたり、反対に他者の意見を聞くだけで自分の考えを恃まないということがないよう、友達のことを聞くことで、より自分の考えを分かりやすく又具体的に発展させたいと思った。

資料2 生徒の振り返り

<主な参考文献>

- 文部科学省：中学校学習指導要領解説音楽編，2018
- 宮下俊也「平成29年改訂 中学校教育課程実践講座 音楽」，ぎょうせい，2018
- 福島和久「平成29年版 新学習指導要領の展開」，明治図書，2017，
- 熊本大学教育学部附属中学校：令和元年度研究紀要，2019